市景 瓦版 ～第25号～

行徳みこしとまつり（市川市景観100選）



【解説】大正時代頃から行徳神輿は盛んに作られるようになった。通称「五ヶ町祭礼」は３年に一度10月に開催され、独特のもみ方で知られる。第３回市川市景観賞受賞。

10月11日（日）

3年に1度の行徳五ヶ町例大祭が開催されます！

江戸時代に行徳の中心地だった本行徳1～4丁目と本塩の5つの町の祭礼で、3年に1度執り行われます。五ヶ町例大祭では、５つの町で共有する神輿を、各町が１日かけて担ぎつないでいきます。



峰崎会長

五ヶ町例大祭について、
本行徳豊受太神宮奉賛会の
峰崎会長にお話を伺いました



「行徳の神輿文化と祭り」は2024年に市の無形民俗文化財に認定されています



五ヶ町例大祭は未明３時の触れ太鼓で始まり、本行徳の総鎮守・豊受太神宮での神前の儀に続き、「御霊遷しの儀」でご神体を神輿にお迎えします。その後、「白丁」たちにより、隣町の下新宿の稲荷神社へ挨拶のための神輿渡御が行なわれます。

五ヶ町の祭りでありながら下新宿の神社に挨拶に赴くのは、かつて五ヶ町の初代神輿が、下新宿から譲り受けたものという伝えがあり、その感謝と礼を尽くすために、今もこのしきたりに従っているようです。

この神事を支えるのが、着物に白いさらしを纏った「白丁」と呼ばれる人々です。各町から選ばれた8～10名ほどの白丁は、下新宿への渡御のほか、神輿の受け渡しという重要な役割を担っています。というのも、神輿を担いで練り歩く「揉み手」たちは自身の町内しか担ぐことができず、町境を越えられないからです。

そのため、地境で一度おさめられた神輿を次の町へつつがなく手渡す架け橋となるのが白丁なのです。高張提灯や太鼓、榊など道中で神事のものを運ぶ役割も担っており、まさに五ヶ町例大祭に欠かせない存在ですね。



◀白丁による渡御

※写真提供：
「わっしょい！行徳」

４面に続く

発行：市川市 街づくり整備課　発行日：令和8年10月発行　電話：047-712-6327　FAX：047-712-6326
メールアドレス：keikan100@city.ichikawa.chiba.jp　WEB：https://www.city.ichikawa.lg.jp



中山参道活性化事業
～参道商店街の活性化のために～

中山参道地区は市川市景観計画において唯一「景観重点地区」に指定され、多くの寺院と商店が集まる寺町らしい景観を残している地区です。近年、さまざまな要因から空き店舗が目立ち、参道としての魅力が失われつつあります。そこで、地元の中山まちづくり協議会と市が連携し、専門家の意見をふまえながら事業者を選定し、中山参道活性化プロジェクトを開始しました。

2024年度ワークショップ



全４回のワークショップで、まちの課題と課題解決のためにすべきことを考えました。



2025年3月に「中山まちづくりプレゼン交流会」が開催され、３つのグループがアイディアを発表しました。

当日は、市内で活躍する企業の代表やインフルエンサー、地域の方々などが参加しました。

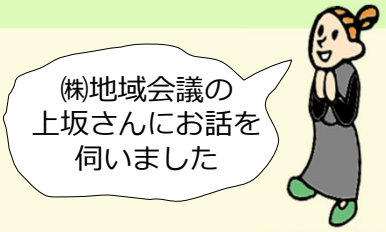
発表が終わった後も、会場内のそこかしこで、さまざまなコミュニケーションの輪が広がっていました。





㈱地域会議
上坂さん

中山参道活性化事業スタート！



中山参道活性化事業の中心は、築71年の旧湯浅寫眞館を再生した交流拠点「なかやまBASE」の整備です。ここではショップやアート、食など多彩なプロジェクトを展開しています。
チャレンジショップ第1号の「革工房yino」に続き、現在はペーパーアーティスト・teteさんのチャレンジショップや、現代アーティスト・小森陽介さんの公開アトリエ「YOKKE's Art Studio」が稼働中。





◀　さらに「発酵レストラン醸し」もオープンし、人々が立ち寄るきっかけを広げています。

一番の手ごたえは、季節ごとのマルシェ開催です。参道を行き交う人が大きく増え、周辺のお店からも「お客様が増えた」と嬉しい声をいただきました。地元や市川に愛着を持つ多くの方々にご来場いただき、「日常的に来てほしい」という思いが届いている実感を得られました。

▼



このほか、なかやまBASEのガレージと2階の旧写真館のスタジオは、市川市内で事業を始めたい方やお店を持ちたい方のために、POPUP出店やワークショップができるテストマーケティングの場として貸し出していまして、そうした挑戦の場としても、なかやまBASEを育てていきたいと考えています。

▶



2階スタジオ

中山で活動する人たちの思い

Q. まちに変化はありましたか？

A.なかやまBASEを中心に駐車場や法華経寺境内を利用し、地元クラフトビールやワインの試飲会、梨の販売等々、数々のプチマルシェが開催され、人の流れが生まれました。



中山まちづくり協議会
平野会長

Q.このまちの魅力は？

A. 歴史と伝統ある法華経寺を中心に多くの寺院が立ち並び、豊かな緑に包まれた穏やかな時間が流れるまちです。季節ごとの行事を通して、伝統文化が大切に受け継がれている点も中山の大きな魅力です。

Q.まちに変化はありましたか？

A.なかやまBASEを中心に、若い世代が足を運ぶ機会が増えました。また、寺の行事に関心を持って訪れる人も多くなりました。（花まつり、酉の市等）

Q.このまちの魅力は？

A.法華経寺を中心に中山町会の一丁目から四丁目が周囲を囲み、京成中山駅から参道商店会と一緒に賑わってきた地域です。

Q.このまちをさらに元気にするには何が必要?

A.今後、展開してきた行事やお店を長続きさせ魅力あるお食事処、お店として定着させ、寺町法華経寺を繁栄していければと考えます。

Q.「活気あるまち」とは？

A.住民・商店・寺院などの想いが一つにつながっているまちです。お互いに感謝と尊敬を持ち、若い世代へ伝統や文化を継承しながら、みんなで中山を愛せるまちだと感じます。



中山まちづくり協議会
松丸副会長

Q.このまちの魅力は？

A.歴史・文化・宗教など、未来へと残したいものの宝庫であること。中山は下総中山駅から一本道でつながっているため、その利点を活用することでまち全体として活性化できると考えています。



中山まちづくり協議会
田中副会長

Q.「活気あるまち」とは？

A.「住民、商店、寺院、行政が地域や業種の枠を越えて助け合い、未来へと繋ぐこと」。
今は個人商店だけで頑張るには限界があります。飲食業や行政なども巻き込み、市川・船橋といったエリアの枠を越えて協力し合うこと。危機感を持って今ともに動き出すことこそが、数年先の活気につながると考えています。

Q.このまちをさらに元気にするには何が必要?

A.参道商店に若い人を誘致すること。法華経寺の年間参詣者や地元の人が買い物できる商店づくり、まちづくり協議会の商店・町会・寺院のさらなる協力が必要だと思います。

Q.このまちの課題とは？

A.参道商店の利用者が減り、店と地域の「顔なじみ」の関係が薄れている点です。多様な店舗が並ぶ街づくりをしないと参道は縮小してしまいます。行政との連携や新規起業の支援を通じて魅力的なお店を増やし、今一度商店街として一歩ずつ変化を起こすことが課題です。

Q.「活気あるまち」とは？

A.人が集って来てくれるまち。安くておいしい食べ物があり、中山のおひなまつりのように見て楽しめるイベントが開催されるまち。



中山まちづくり協議会
杉山さん



地域会議
上坂さん

Q.このまちの魅力は？

A.観光地化されず、信仰と日常が溶け合う参道の雰囲気です。750年以上の歴史を持つ法華経寺があり、住民がお参りに訪れる傍らで昔ながらの商店も並ぶ、どこか懐かしく情緒あふれる空気が残っています。

Q.この街をさらに元気にするには何が必要？

A.やはりイベントが月１回くらいあると良いです。清華園を解放して物づくりワークショップなど、子どもからお年寄りまで楽しめるイベントを考えると良いと思います。

Q.まちに変化はありましたか？

A.若い人、子ども連れの親子を見るようになりました。

Q.このまちをさらに元気にするためには何が必要？

A.これまでの取り組みを一過性にせず、地域や商店会、大学が連携して自走できる運営体制をつくることが重要です。また「なかやまBASE」を核に参道の回遊性を高め、地域に愛着を持つ方々が「ちょっと立ち寄りたくなる」「用事があって行きたくなる」場所を参道内に増やしていくこと。それこそが、これからの街づくりで最も大切なことだと考えています。

下新宿渡御を終えると、揉み手24人と音頭取り2人による町内渡御が始まり、本行徳一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、本塩という順番で神輿が担ぎつながれていきます。



行徳揉み（もみ）

行徳の神輿渡御に欠かせないのが、「行徳揉み」と呼ばれる独自の担ぎ方です。行徳揉みには、「さし」「放り受け」「地すり」があります。これらは、天の神様（さし）や地の神様（地すり）へ五穀豊穣を感謝し、放り受けは「神様を喜ばせる」などの意味があると言われています。

行徳では神輿を「担ぐ」とは言わず、「揉む」といいます。また、担ぎ手のことも「揉み手」と呼ぶよ♪



▲【さし】神輿の揉み初めは差しから始まります。音頭取りの合図で揉み手が「わっしょい！」の掛け声とともに神輿を差し上げます。



▲【放り受け】音頭取りの合図で神輿を水平に放り上げて、さらしを巻いた両手首で神輿を受け止めます。神輿が宙に浮いている間に2回手をたたきます。



24人の揉み手で五尺七寸の最大規模の神輿を揉んでいます。
横棒なしの担ぎ棒2本で水平を保ちながら揉むのは、とても難しいそうです。



▲【地すり】神輿を地面すれすれまで下げ、神輿を中心に一回りします。



峰崎会長

早朝から1日かけて5つの町で担ぎつながれた神輿は、本塩の豊受神社に到着し、ここでクライマックスの宮入りを迎えます。神輿の上の鳳凰が鳥居をくぐると祭りは終わりを告げるのですが、ここで終わりを惜しむ揉み手たちが神輿を神社の外へ押し戻そうとし、また祭を取り仕切る役員たちは神輿を早く神社内に入れようとして、その攻防が何度も繰り広げられます。



本塩の豊受神社におさめられた神輿は、着御の儀が行なわれ、その後宮元へ帰参します。宮元の神明社では、還御の儀（かんぎょのぎ）・御霊納（みたまおさめ）が執り行われて、長い一日が終わります。

五ヶ町の祭りは、揉み方が特徴的なだけでなく、伝統的な神事が多く非常に見ごたえのあるものです。是非、現地に足を運んでいただき、その熱気を肌で体感してください。